留学のすすめ

-アメリカ建国の地で教育を学ぶ-

What I Experienced through Study Abroad:

Learning Education in the U.S.

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 グローバルラーニングセンター 特任助教 **水松 巳奈**

MIZUMATSU Mina

(Global Learning Center, Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University)

キーワード：アメリカ、大学院留学

留学は突然に…

国際教育の分野に関わり始めるようになって今年で早くも８年が経つ。現在の仕事に就くまでに、いくつかの業務経験や海外経験を積む機会があり、これらの原体験を通して国際教育の分野に興味を持つようになった。高校時代は語学留学でイギリス・ケンブリッジ、学部時代には交換留学でアメリカ・シアトル、語学留学で韓国・ソウルに滞在して学ぶ機会を得た。その中でも、社会人になってから経験した大学院留学は私にとって特に刺激的だった。今回は、そのアメリカの大学院での留学経験について紹介する。実際に留学していたのは少し前のことになるが、当時のことを振り返りながら、書いてみたい。

大学の職員として大学の国際化に携わる仕事をするようになって数年が経った頃、もっと専門的に高等教育の分野に関わりたいと思うようになった。具体的には、大学の国際化におけるスタッフ・デベロップメント（SD）の必要性を感じるようになったことがきっかけだった。これを機に漠然と大学院への進学を考え始めていたが、当時、日本では国際教育について学べる大学院の数が限られていることを知り、「留学」が少し視野に入ってきていた。そんな折に、たまたま参加した国際教育者の集まりで、とある方に自分の思いを話すと、「（やりたいと思っているなら）今しかないでしょ」と背中をポンッと押された。まだ某予備校も宣伝文句として使っていなかった頃のことだ。この時点で、大学院出願まであと半年程度という状況であったが、私はこの日を境に大学院留学を本気で目指すことを決めた。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

社会人になってからの留学というのはそれほど珍しくないのかもしれないが、働きながらの留学準備はなかなか大変だった。終業後や週末に、英語学習や出願準備をし、次第にアメリカに大学院留学するという目標の実現化を実感するようになっていった。それと同時に、アメリカの大学院で学ぶことにはお金が相当かかる、ということも知り、大学院の出願に加えて奨学金の申請も行った。その結果、私は大学院に無事合格し、さらにフルブライト奨学金をいただいて、留学できることとなった。

アメリカの建国の地、フィラデルフィアでの学生生活

私が留学していたペンシルベニア大学（University of Pennsylvania）は、アメリカの東海岸でニューヨークに次ぐ都市、フィラデルフィアにあった。「Penn(ペン)」の愛称で親しまれているこの大学は、名前からよく州立大学と間違われるが、全米で初めて“University”と名付けられた私立大学である。全米で4番目に古く、創立者の一人が、「アメリカ合衆国建国の父」の一人として有名なベンジャミン・フランクリンである点も、その歴史の長さを感じさせられる。アイビー・リーグの一校でもある。大学のキャンパスは、フィラデルフィアのダウンタウンと目と鼻の先にあり、いわゆる都市型のキャンパスだ。私の学んだ教育大学院は、キャンパスで一番目立つ、アメリカで最古のビジネススクールであるウォートン・スクールの建物の隣にポツンとある、小さなレンガ作りの建物だった。

写真１：教育大学院の建物。奥に少し見えるのがウォートン・スクール。

（ペンシルベニア大学教育大学院の許可により掲載）

私はこの大学院で高等教育行政について学んだ。平たく言えば、大学の経営についてである。この大学を選んだのは、実学を尊重している点に惹かれたからだ。また、先述の通り、すでに大学での国際交流の畑でのキャリアを築き始めていた私は、できるだけ仕事から離れることなく、学位も取得したいと考えていた。その時に見つけたのがこちらの大学院で、１年で修士課程を修了できるのも私にとって魅力的だった。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

一般的に、留学には不安がつきものなのかもしれないが、この留学には胸躍る思いしかなかった。自分が「したい！」と思ったことを貪欲に学べ、慣れ親しんだ場所とは違う文化の中で、似たような志の学生たちと一緒に学べることにワクワクしながら、現地に向かったことを今でも覚えている。

大学院入学後、初めての授業で先生に言われたことは、今でも時々思い出すことがある。「ペンシルベニア大学にようこそ。今日からあなたたちは世界のトップの大学で教育を学ぶのです。出願書類の中では、『世界へのインパクトを与えたい』と語っていた人が非常に多かったですが、今、私が立ち寄ってきたトイレで見た光景は何だったのでしょう。トイレットペーパーが床に転がっていたにも関わらず、それに対して誰も何もしていなかった。トイレをもろくに使えない人たちが、世界の教育に物申す資格はないのです。今すぐ普段の自分の行いを顧みなさい。これこそ未来の教育のリーダーが意識すべきことです。」たかがトイレ、されどトイレ――。授業初日に言われたこの言葉は今でも時々思い出し、はっとする。世界を意識すること、それは同時に、自分の身の周りのことにも気を配ること。当たり前のようで、このように世界を見たのは初めてだった。背筋が伸びる思いがした。

自分で切り開いていった先に見えたもの

実際、大学院の門を叩いてみると、予想していた環境と異なり、戸惑うこともあった。まず、同じ教育大学院に在籍する日本人は当時、私だけであった。教育大学院の留学生の90パーセント以上を中国人が占めていると言われていたほど、周りには中国からの留学生はたくさんいた。しかし、日本人は私たった一人だけだったのだ。私の専攻していた「高等教育」には、留学生は私を含めて３名しかいなかった。先生には、「久々に日本人を見た」と言われることもしばしばあった。このため、日本の話になると、すぐに私のことを思い浮かべてくれる人が多かったのは有り難かった。その反面、ホームシックになり、困難な局面に直面した際、自分と同じ文化を共有できる人が近くにいないことの苦しさも経験した。当時、「日本人学生の内向き志向」など盛んにメディア等で取り上げられていたため、身をもって日本人留学生の少なさを実感することとなった。

「アメリカ人」ばかりのクラスの中で、日本人である自分がどのように授業に貢献できるのだろう。このことは大学院にいる間、ずっと私の中で問い続けてきた問題であった。クラスメートと授業に出る度、英語力の違いなどから、なんとなく自信喪失することもあった。授業内での自分の発言が、他のクラスメートの視点と随分異なることが気になることもあった。そのため、特にグループワークではどのように自分の価値を発揮するか考えながら臨むようにしていた。

よく言われることではあるが、アメリカの大学院の授業についていくことは大変だった。興味のある授業にチャレンジしたものの、難しい授業に当たることも多かった。平日は、その日の授業の復習と、翌日の授業の予習。放課後、図書館の席を確保することにも必死だった。週末になると、友人と予約していた大学寮の一室に閉じこもって、一日中パソコンと本に向かうことが習慣になっていた。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

今考えれば、よくもそんなに集中力を持続できたな、と思うのであるが、当時は一心不乱にただ目の前にあることに夢中になって注力した。このように、寝食を共にした仲間は一生の友である。

少し話は逸れるが、当時よく聞いた言葉の一つとして「interdisciplinary」というものがある。これは「学際的な」とか「分野を横断した」という意味を持つ言葉である。私は在学中、週１回、ビジネススクールの先生による授業を受講していた。教育分野におけるビジネスプランを考え、投資家の前で優秀なアイディアを提案できたチームには、実際に投資をしてもらえるチャンスがある、という授業だった。この授業には、私のように教育大学院に属していながらビジネスにも興味がある学生が履修していたり、逆に、MBAの学生で教育分野に興味がある人が履修していたりした。このように、自分の所属や専攻を超えて学ぶことで、出会う人が変わり、自分の視点や考え方も変化した。国籍も専攻も異なる学生がチームとなり、共にプロジェクトを進めるのは容易いことではなかった。チーム内では教育の専門家として扱われ、自分の発言に責任を持つことの重要性を実践の中から学んだ。授業を通して、数多くの課題やグループワークをこなすうちに瞬く間に時は過ぎ、セメスターが終わる頃には、大きな自信と達成感を得られていた。振り返ってみると、非常に貴重な経験だったと思う。

課外では、友人が主催する英会話サークルに週１回のペースで通った。自分が居心地の良い環境を自分の力で整えていく、ましてや異国の地でそうするのは時に葛藤があった。しかし、異文化の中でも自分の居場所が見つかったとき、自分にとって大きな自信につながった。次第に、自分で日本語を教える機会を設けたり、国際教育の学会に足を伸ばしてみたり、と行動範囲も広がっていった。

このような経験を通じて、英語力が向上したのはもちろんのことだが、授業での困難な課題を解決したり、クラスメートと対等に議論したりすることで、自分の考えに対しても自信が持てるようになった。このように、大学の授業で色々なことに積極的に挑戦してみたり、留学を通じて知りあった人たちと切磋琢磨をしたりすることを重ねていくうちに、最初は戸惑うこともあった留学生活も次第に切り開かれていった。

写真２：クラスメートとスポーツ観戦（筆者友人より提供）

留学を経て今思うこと

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

このような経験のすべてが、今の自分の確立に大きく関わっている。留学は、人間形成に大きく影響するとは言うが、私の中で一番大きく変わったことは、当たり前かもしれないが、世界を見る目が変わったことだ。留学先で出会った様々な国や文化背景をもつ人たちと「友人」になったことは大きい。世界のニュースに興味を持ち、「『友人』の国では、何が起こっているのだろうか」と、そのように世界情勢を身近なものとして捉えるようになった。留学前は、自国以外のことは何となく遠い国で起きていることだと理解していた。それが、今では世界で起きていることは、「友人」の国で起きていることと考え、自分にとってより現実味があることだと考えるようになった。文化や言語の壁があるが故に解り合えなかった人達も、例えば英語を使って意思疎通をしたり、同じ目標を共有したりしてみると、お互いを理解するということはそれほど難しくないというケースが多々ある。世界中の様々な人達と価値観を共有してみたことで、留学後の自分は、新しく会う人や初めて知ることに対してよりオープンに接することができるようになった。

「グローバル化」という言葉が一人歩きして、大層なもののように思えてしまう昨今、様々な新しいアイディアが創出され、多様な人々の距離がどんどん縮んでいっている。そんな時代だからこそ、新しい価値観にも柔軟に対応し、また、『人』とのつながりも大切にできることが、真のグローバル化への一歩なのではないだろうか。

写真 3：卒業式会場に行く途中にクラスメートと（筆者友人より提供）

最後に

よく学生に「留学はいつしたらよいと思いますか」と聞かれることがある。様々な種類の留学を経て、今私が思うのは、「自分にとってタイミングが良いときが一番。ただ、迷っているのであれば、思い切って飛び込んでみて」ということだ。正直、誰かに言われて無理やり留学に行っても、時間が勿体無い。留学することの意義は、自分が興味あること、学びたいことについて、いつもと異なる人たちと異なる環境や視点で考えたり、議論したりできることであると私は思う。だからこそ、言われるがままに留学に臨んでも、留学を十分に満喫できないのではないだろうか。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

実は私は現在も、アメリカの大学で博士課程に在籍している。日本の大学で働きながら、二足の草鞋を履いている状態だ。指導教官とはスカイプで話し、授業聴講やレポート提出はすべてオンラインだ。夏にのみ現地に出向き、授業をいくつか履修するという学生生活をしている。興味があれば、今の時代、こんな留学だってできるのだ。

最後になるが、フルブライト奨学生として国際教育に従事する立場から、フルブライト上院議員の以下の有名な言葉を紹介したい。

教育交流は、「国家を人々に変える」、すなわち国際関係を人間的にすることができます。（中略）私は教育交流が人々の間に必ず友好的な感情をもたらすものだとは思いませんし、またそれを目的とすべきだとは思いません。（中略）自分たちの国で育った人々と同じように喜びや悲しみ、残酷さや優しさを共感できる人々が自国以外の地にも住んでいる、ということが実感できれば充分だと考えます。

VUCA[1]社会と呼ばれる時代の中で、今後も国際教育に関わっていく一人として、テクノロジーの発展で疎遠になってしまいがちな『人』とのつながりを大切にし、『人』との関わり合いの中で、グローバルな社会で活躍できる人材育成を促進していきたい。

[1] Volatility、Uncertainty、Complexity、Ambiguity の頭文字

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.